

【農業水利施設の魅力を知ってほしい (No.7) ; 鳥取の大口堰用水 (山白川) の斜め堰は圧巻だった (2023年11月)】

主に鳥取県内を流下する1級河川は、東から千代川、天神川、日野川である。今回は千代川を水源とする大口堰用水を紹介したい。大口堰用水は山白川とも呼ばれて、千代川右岸を受益地とする農業用水路である。約300年前の江戸時代享保年間にできたとされる。かつての受益面積は約800haであったが、下流域の都市化が進んだことから最近の受益面積は約300ha強のようである。この大口堰用水は風情が良く、特に頭首工が斜め堰で圧巻なのでそれを含めて下流の鳥取駅近くの数津用水堰までの様子を紹介したい。今回紹介する範囲を図1, 2に示す。



図1 大口堰用水紹介エリアその1



図2 大口堰用水紹介エリアその2

1. 大口堰頭首工

大口堰頭首工（写真 1）は図 1 にあるように、鳥取市円通寺地先の千代川に設置された斜め堰から取水される。慶長年間に、近くにある吉方村の庄屋の近江屋安兵衛が全財産をなげうって開削を始めた大口堰に用水を取り入れる堰で、1720 年ころに完成したようである。

南西方向から流下する千代川がその向きを北西方向に変える地点に、文字通り「斜め堰」を構築することで、河川水を取り込んでいる。当方が全国見た中でも、岡山の建部井堰や福岡の山田堰、熊本の鵜の瀬堰に並ぶ、広大で美しい斜め堰である。



写真 1 大口堰頭首工

2. 大口堰頭首工から百合用水堰まで

大口堰頭首工から取り込まれた用水は、その後分水工（写真2のA）を通過すると、鳥取市円通寺地先を流下する（写真2のB）。その後、倉田排水機場へと繋がる余水吐（写真2のC）を通過し、百合用水堰（写真2のD）に至る。

比較的広い水路幅の水路床が土で水草が生える用水路が流下する。水もきれいで、歩くとすがすがしい気分になれるはずである。



写真2 大口堰頭首工から百合用水堰まで

3. 百合用水堰から数津用水堰まで

百合用水堰を過ぎると、広い水田地帯を大口堰用水は流下する。大口堰用水から末端用水路（写真3のA）も分水し、水利システムが複雑になる。その後、数津用水堰（写真3のB）に至る。ここも水路構造は上流側と大差なく（写真3のC）、気持ち良い水路である。

数津用水堰から下流側は国道29号線やJR鳥取駅近傍を流下するので、宅地が急に増えて水田は見なくなる。当方は、数津用水堰を過ぎて国道29号線近く（写真3のD）まで用水路を散策して切り上げた。



写真3 百合用水堰から数津用水堰まで

4. おわりに

大口堰用水の好きなところは、堅牢そうな斜め堰と気持ちよくなれる構造の幹線水路が現在も利用され続けていることである。用水路はおおむね管理道路や県道等に平行しているので、歩いて散策しやすい用水路である。大口堰頭首工へのアクセスは JR 鳥取駅から日の丸バスで円通寺橋バス停下車徒歩 5 分である。数津用水堰からは徒歩 5 分の数津バス停から日本交通バスで JR 鳥取駅までアクセスできる。大口堰頭首工から数津用水堰までは 5km 程度の道のりなので、ちょっとしたウォーキングに最適である。

【余談】

千代川の上流には智頭という町がある。智頭町の中心部から北東に 3km ほどの山中に板井原集落 (写真 4) がある。智頭町観光協会の文章を借りると「始まりは平安時代に遡る事から平家落人の隠れ里とも言われています。昭和 42 年に板井原トンネルが開通するまでこの地に車が入ることはなく、徒歩で行き来する「六尺道」だけが唯一の道でした。集落には、かやぶき屋根の「藤原家住宅」、築 50 年を超える古民家群、昭和初期に建てられた「板井原公民館」、集落を見守る「向山神社」、水車小屋、炭焼き小屋などが現存しています。昭和 30 年代の山村風景がそっくりそのまま残っていて集落を訪れる人はタイムスリップしたような気分を味わうことができます。かつては 20 数戸に住まう人々がありましたが、今では通年生活している世帯はわずかになりました。春になると人の気配を感じるようになりますが、様々な農機具・ざる・ムシロ・タル等の一昔前の民具が、集落が活着していることを伝えています。今では「日本の山村集落の原風景」として文化遺産にと注目され、2004 年から「鳥取県伝統的建造物群保存地区」に選定されています。」とある。紅葉が非常に美しく、集落内を流れる溪流と古民家の景観も大変良いのでぜひ訪ねてほしい場所である。



写真 4 板井原集落